

くビタミンB₁の世界的権威

十一 高木兼寛



明治の初めのころのことです。

「先生、からだがだるく、足がむくんで歩けないんです。」と訴えてくる患者が多く、医者にもその病気を治す方法が分からず、困りはてていました。

この病気は「脚気病」といってひどくなると命をなくすこともありました。

この病気の原因がビタミンB₁の不足によるものだと世界で初めて発見し、食事の工夫によって治ることを証明した人物こそ宮崎県出身の高木兼寛なのです。

兼寛は、今の東諸県郡高岡町穆佐むかさに生まれました。七歳のころから中村敬助という先生のもとで人間としての生きる道を学びました。また、この地には、多くの村人から尊敬され、慕したわれていた黒木了輔りょうすけという医者がありました。少年兼寛は、小さ

いながらも心ひそかにこの了輔にあこがれ、

(ぼくもりっぱな医者になって、みんなの命を救いたい。)

と心に決めていました。そのとき彼は、十三歳でした。

十七歳のとき、鹿児島で医学の基礎を学び、二十四歳で海軍省に入って、海軍病院で働くことになりました。四年後、政府の命によりロンドンのセント・トーマス病院学校に留学して西洋医学を学び、数多くの実績を上げて六年後に帰国しました。

帰国後の兼寛は、海軍省の乗組員に広がっていた脚気病の絶滅に全力を注ぎました。しかし、兼寛がいちばん気になっていたことは、人々の中には、いまだに医者にみてもらえずに苦しんでいる人が、たくさんいるということでした。

「まったく何ということだ。数多くの人々が苦しんでいるのに、それを助けようとする人が本当に少ない。何としてもイギリスなみに立派な病院をつくり、今まで医者にみてもらえなかった人々を助けたいものだ。」

と考えるようになりました。

そこで、三十五人の仲間たちとともにお金を出し合って、有志共立東京病院（現在の東京慈恵会医科大学病院）を設立しました。

やがて、病院の評判が広がり、病院の前には長い列ができるようになりました。

しかし、残念なことに病院を経営していくだけのお金が足りなくなってしまうました。頭を悩ませた兼寛は、当時の政府に資金の援助を願い出ました。しかし、なかなか説得しきれず月日だけが流れていきました。

不安とあせりの中で、兼寛はすっかりまいってしまい、この仕事を投げ出さなくなってしまいました。しかし、兼寛は、日本に帰ってきたころのことを思い出し、決意を新たにしました。そして弱気になりつつある仲間に向かって、



「今は苦しいが、ここでくじけたら、また、たくさんの人々が病気に苦しむことになる。何としてもがんばろう。」

とほげますのでした。

そして、自分の足で毎日、西へ東へ歩き回って、ついにいろいろな人たちからの募金協力や援助を得ることに成功したのです。これは兼寛の熱意が人々に通じたからでしょう。

おかげで、多くの人々が進んだ治療を受けることができるようになったのです。

彼の残した様々な業績は、今も世界各地で脈々と生きています。